■論　文■

「パストラルケア」と「スピリチュアルケア」

大　柴　譲　治*

抄　録

「既成宗教」が力を失いつつある現代社会において人々は今，「真のスピリチュアリティ」を求めている。それは「宗教的に成熟した社会」（ボンヘッファー）が到来したためなのか，それとも肥大化した「近代自我（cogito-ego）」（デカルト）が行き詰まってしまったためなのか。マルティン・ブーバーが『我と汝』（1923）を通して，他者を自己の経験・利用の対象としてしか見ようとしない人間の独白（モノローグ）的な「我―それ」的態度に警鐘を発して久しい。当論文はキリスト教の「パストラルケア（牧会）」の視点から，人間の有する「魂のニーズ」に光を当て，「スピリチュアリティ」と「スピリチュアルケア」について考察する。そして個々の「我と汝」の出会いにおいて「永遠の汝」（神）からの呼びかけを聴き取り，その「声」に応答してゆく対話（ダイアローグ）的な「自己（credo-ego）」への脱皮の道筋を模索する。そこには「打ち砕かれた魂」のみが「恩寵」として味わい得る「至福のスピリチュアリティ」が存するであろう。

Keywords：パストラルケア，スピリチュアルケア，スピリチュアリティ，マルティン・ブーバー，我と汝

1）時代状況：「既成宗教」の衰退と「スピリチュアルブーム」の勃興

最近欧米では次のような言葉がよく聞かれるという。「自分は既成宗教には属さないが，スピリチュアルなものは大切にしている（I'm not religious, but spiritual.）」。「キリスト教国」として歴史を重ねてきた欧米においても「既成宗教」は「世俗化」と「価値の多様化」，「政教分離」と「個人主義」という「ポストモダン時代」の大きなうねりの中で急速に力を失いつつあり，「国教会／領邦教会」から離脱する人々も増加していると聞く[1]。西欧で「非キリスト教」的な「宗教」や「運動体」が多くの参加者を集めているのも，また広島や岡山にある「国際禅道場」などに昨今少なからぬ外国人の入門者の姿が見受けられるのも，ある意味では「西欧キリスト教社会」の行き詰まりを表わしているであろう。

日本においてはどうか。一面では，依然とし

* Oshiba, George J.
日本福音ルーテルむさしの教会・スオミ教会　牧師
ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校　非常勤講師
上智大学　グリーフケア研究所　客員所員
賛育会病院　緩和ケア病棟　チャプレン

て 1995 年のオーム真理教サリン事件以来の「宗教アレルギー」が社会の底流に存在するように思われるが，他面では，NHK でキリスト教に関連した大河ドラマが二年続いて放映されたり（2013 年の『八重の桜』と 2014 年の『軍師官兵衛』），朝の連続テレビ小説でもクリスチャンの主人公が取り上げられて高い視聴率を保つ（『花子とアン』）などの現象が見られる。一般書店を見ても，この「本の売れない時代」に少なからぬ量の「スピリチュアル関連書籍」が書棚に並び，依然として「スピリチュアルブーム」が持続している感がある。3.11 東日本大震災に際してはインターネットを通じて世界中から祈りと支援の輪が寄せられ，若者を中心とした多くの人々が黙々とボランティア活動に馳せ参じたことは記憶に新しい。この「ボランティア精神」こそ，「ディアコニア」としてキリスト教がこれまで大切に育んできたものではなかったか。そのような無数のボランティアたちの姿に私自身，石巻に足を運んだ折に「まだまだこの世は捨てたものではない」と熱いものが込み上げてきたことを思い起こす。「既成宗教」が「組織の維持・管理」に力を注いでいるうちに，人々はこの世の直中でしっかりと目を凝らして冷静に現実を見極め，自らを生かし，自らの「魂」を活性化させる「真のスピリチュアリティ（霊性）」を求めているように私には思われるのである。

3.11 以降は「仏教」を中心とした「既成宗教」の側も，自らの枠を超えた連帯と奉仕の中に「自己のアイデンティティ」を再確認し，それを刷新しようと努力を重ねている[2]。「キリスト教会」においては戦後 1950 年代の「キリスト教ブーム」の時代に教会の門を叩いて洗礼を受け，忠実なメンバーとしてこれまで教会を支えてきた人々が次第に高齢化し，現在続々と「天上の教会」に移されつつある。今後の「地上の教会」が財政的にも組織的にも人材的にもどうなってゆくかその先行きに不安を持つ者も少なくない。筆者の属する「日本福音ルーテル教会（JELC）」も 10 年後の姿を思い描くことは難しいという現実がある[3]。そのような状況の中にあって，今ここで，筆者が専門とする「パストラルケア（牧会学）[4]」の視点から，「スピリチュアリティ」と「スピリチュアルケア」について探求してゆくことは，今後の「キリスト教会」の「宣教 mission」のあり方を模索してゆく上でも意義あることではないかと考える。

「既成宗教の衰退」と「スピリチュアルブームの勃興」はどこから来るのであろうか。終末的な「時代の閉塞感」がそれをもたらしているのか。あるいはまた，かつてディートリッヒ・ボンヘッファーが獄中で預言したように「成人化した社会」が到来しつつあるのか。本稿では「既成宗教」が失いつつある「力」とは何であり，時代の「スピリチュアルブーム」が多くの人々を惹きつける「魅力」とは何であるのかということを意識しながら，キリスト教の「パストラルケア（牧会学）」の立場から「スピリチュアルケア」についていくつかの断面を記してゆきたい。ルター派的な表現かもしれないが，パンネンベルクが言うように「教会の力の源泉」はこの二千年の間，神のみ言と聖礼典（サクラメント）を通して常に「キリストの現臨（リアルプレゼンス）」の中に保持され，「神の聖霊の息吹」によって刷新されてきた[5]。その意味でこの拙論は，「キリスト教会」の中に「霊的刷新力」を回復しようとする一つの小さな試みでもある。

2）現代の課題：肥大化した「cogito-ego」から真の「credo-ego」への転換

“cogito ergo sum.（我思う，ゆえに我あり。）”近代以降，デカルトに始まる「近代自我 ego」の発見を出発点としてその延長線上に人間はその学問的・科学的な歩みを積み重ねてきた。そのことには大きな意義があり，その歯車を後退させることは誰にもできないであろう。しかし，その「近代自我の発見」とその展開の歩みは同時に，人間から「対話性」を奪い，「自我 ego」のモノローグ的な「肥大化」と「自己絶対化」とをもたらしてきたという側面を併せ持つ。マルティン・ブー

バーによると，本来人間は「二つの根元語」を世界に向かって語るべき存在である。ブーバーは言う。「世界は人間にとっては，人間の二重の態度に応じて二重である。人間の態度は，人間が語り得る根元語（Grundwort）が二重であることに応じて二重である」[6]。二つの根元語とは，根元語「我―それ Ich-Es」と根元語「我―汝 Ich-Du」である。人間はその両方の根元語を世界に向かって語るべき存在なのであるが「cogito-ego」の肥大化に伴って人間は「我と汝」の出会いにおける豊かな意義と喜びとを見失い，ただモノローグ的な根元語「我―それ Ich-Es」を語ることのみに終始するようになった。世界を自己の「経験・利用の対象」としてしか見なくなってしまったのである。

このブーバーの指摘は確かに的を射ていると思われる。この「繭化」[7]した「自我 ego」の閉塞状態をどのように突破することができるかが私たち現代に生きる者の課題となる。現代人が「スピリチュアリティ」を求めている背景にはそのような閉塞状況があることは前述した通りである。ブーバーは「永遠の汝」たる神からの呼びかけに根元語「我―汝」をもって応答する生き方を示す著書『我と汝』(1923）を通して鋭く警鐘を発し，私たちの中に「真の人間性」を回復しようとした。彼は言う，「あらゆる真に生きられる現実は出会いである」と[8]。他者との関係性を喪失して自我が肥大化し孤立化してしまった私たち。この「我―それ」的モノローグ的な「cogito 自我（以下は cogito-ego と記す)」からの「脱皮」こそ，現代に生きる私たちの課題であると言わなければならない。「そしてこれはまったく厳粛な真実なのだ，きみよ，それなくしては人間は生きることができない。だが，それとともにのみ生きる者は，人間ではない。」[9]

カトリック新聞社の松隈康史氏は，ある講演の中で現代社会における「自我の肥大化」の特徴として「コンビニ時代」「多チャンネル時代」「インターネット時代」という三つを挙げている。いずれも「自我 ego の欲望」を満足させる方向に現代社会が「進化」してきたことをよく示している。しかしそれはどこまでも孤立化した「cogito-ego」の肥大化路線でしかなかった[10]。

私の恩師でもあった故小川修氏（1940–2011）は，「聖書には直接記されていないが」と断りながらも，神がまずアダムに「アダムよ」と呼びかけ，アダムがそれに対して「はい」と即座に呼応したであろうことには重要な意味があると説いている。禁断の木の実を食べた結果，「神の呼びかけ」に応えようとしなくなった「アダム（人間)」の中に，言葉本来の意味での「我慢（『我』が高慢になること）の罪」があると小川氏は見ているのである[11]。小川氏はデカルトの言う“cogito ergo sum”の「思惟する我 cogito-ego」とアンセルムスの言う“credo ut intelligam”の「信じる我 credo-ego」とは，同じ「我」であっても両者は全く異なる「我」であると指摘する[12]。前者は独白的で孤立化した（哲学者の井上忠氏の表現に沿って前述のように「繭化した」とも呼ばれる)「cogito-ego」であるのに対して，後者は神との関係の中に置かれた，どこまでも対話的で人格応答的な「credo-ego」なのである[13]。ブーバーの表現を借りれば，「cogito-ego」とは根元語「我―それ Ich-Es」における「我 Ich」であり，「credo-ego」とは根元語「我―汝 Ich-Du」における「我 Ich」ということになろう[14]。小川氏は「宗教的欲望を満足させようとする人間」の中に最大最悪の「cogito-ego」の欲望（我欲）を見ている。神は人間をご自身との契約関係の中に向かい合う存在として「神の似姿 imago dei」に造り給うた。それゆえ，どこまでも自己中心的な「cogito-ego」として我欲を満足させるという「我慢」の一線上には，神の姿は見えてこず，「真の救い」は存在しない。井上陽水が歌うように，「限りないもの，それが欲望」なのである。「我思う」という「cogito-ego」は打ち砕かれて，根元語「我―汝」を世界に向かって語る「我」が，「我信ず」という神との関係に生きる本来の人間としての「credo-ego」が再生する必要がある。神が求める「悔い改め（メタノイア)」とはそのような

事態を指している。単なる「生の方向転換」ではなく，パウロがガラテヤ 2：20 で語っているような「主体の転換」がそこでは射程に入っている。

ところで，「cogito-ego」が打ち砕かれて（死んで），「credo-ego」として私たちが新たに再生（復活）するためには何が必要なのであろうか[15]。「人生の危機的状況」（crisis）の中で私たちが味わう「痛み pain」[16] は，「新たな我　credo-ego」である「真の自己 self」が誕生し，「打ち砕かれた魂」が覚醒するための「産みの苦しみ」として位置付けることができよう。パウロが私たちキリスト者は「キリストのために苦しむことをも賜っている」と語る通りである（フィリピ 1：29）。例えば「歯痛」が私たちに「健康（well being）の喪失」に気づかせ，歯医者に行くように強く促してくれるように，「苦しみ痛むこと」を通して私たちは「大切なことの喪失」に気づかされてゆくのである。ズキンズキンとする痛みは同時に私たちが「今」「ここで」「生きている」ことに気づかせてくれる。そのように「痛みの感覚」には確かに「覚醒作用」がある。「痛み」や「違和感」という「自覚」を伴わない病気ほど怖いものはない。気づいた時には手遅れになってしまうからである[17]。

前章で挙げた「既成宗教の衰退」と「スピリチュアルブームの勃興」という時代的な現象の中には，痛みの感覚が麻痺してしまった「既成宗教」に対する人々の失望と，モノローグ的な「cogito-ego の肥大化」という「時代的な閉塞感」の中で，少しでも「清浄な空気 fresh air/renewed spirit」を得ようともがいている現代人の「切なる呻き」が表現されているようにも思われてくるのである。

3）「パストラルケア」と「スピリチュアルケア」

キリスト教会は二千年に渡る「牧会 Pastoral Care（Poimenics）/Seelsorge」の歴史を有しているのだから，私たちはそこから豊かに学ぶことができるはずである。牧羊を日常とすることのない日本人には「牧会」についての具体的なイメージも浮かびにくいし，「牧会」という言葉自体も馴染みにくいであろうが，本来「パストラルケア（牧会）」とは「羊飼いが羊の世話をする」というところに由来する言葉である。ヨハネ福音書 21 章には，復活の主がペトロに三度「わたしを愛するか」と問うた後に「羊の世話をしなさい」と命じる場面が記されている。

「二度目にイエスは言われた。『ヨハネの子シモン，わたしを愛しているか。』ペトロが，『はい，主よ，わたしがあなたを愛していることは，あなたがご存じです』と言うと，イエスは，『わたしの羊の世話をしなさい』と言われた。」（ヨハネ 21：16）

ここには「牧会」とは「復活の主」が「教会」に委託した「務め」であることが明示されている。ヨハネ福音書はここで主が用いた言葉（本来それは当時のユダヤ人たちが通常用いていたアラム語であったであろうが）を「βόσκω（食べさせる）」（15 節と 17 節），「ποιμαίνω（群れを養う）」（16 節）という二つのギリシャ語を用いて記している。「Poimenics（牧会学 / 牧羊学）」という語は後者（ποιμαίνω）から由来する。ここで私たちは「主はわたしの牧者であって，わたしには乏しいことがない。主はわたしを緑の牧場に伏させ，いこいのみぎわに伴われる」（口語訳聖書）と高らかに歌うあの有名な詩編 23 編をも想起するが，そこではヘブル語で動詞の רָעָה（ラーアー）という語から派生した「羊飼い（ローエー）」という語が用いられている。これは「shepherd（羊の群れの世話をする）[18]，pasture（牧草を食べさせる）」という意味を持つ語である。

そこから理解されることは，「パストラルケア（牧会）」とは第一義的に「私たちの羊飼い」である「キリストご自身」の「働き」であるということである[19]。「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て，打ちひしがれているのを見て，深く憐

れまれた」(マタイ 9：36) とあるように，それはキリストご自身の「憐れみのみ業」なのである。賀来周一氏は「牧師は羊飼いではなく，牧羊犬にすぎません。真の羊飼いはただイエス・キリストお一人だけなのです」(賀来語録より) と語るが，まことに言い得て妙である[20]。私たちは「見えないキリスト」の見える「からだ（肢体 / 手足)」であるから，そのように復活の主ご自身によって用いられ，キリストの働きに参与させられてゆくのである。またこの「牧会の務め」は「復活のキリスト」から「教会」全体に託されている働きであるから，「牧会の担い手」としては「牧師」のみならず「信徒牧会者」をも視野に入れておきたい。パウロも「喜ぶ者と共に喜び，泣く者と共に泣きなさい」(ローマ 12：15) と勧めているが，私たちには教会員が相互にケアし合うことができるような自助的な「信仰共同体の形成」が求められているのである[21]。ブーバーは言う。「真の共同体とは次の二つのこと，すなわち，すべてのひとびとがひとつの生ける中心にたいして生ける相互関係のなかに立つということと，そして彼らどうしがたがいに生ける相互関係のなかに立つということによって成立するのである。」[22]

人間を「身体的（フィジカル）・心理的（メンタル）・社会的（ソーシャル）・知的（インテレクチュアル）・霊的（スピリチュアル）なニーズを持つ存在」として全人的かつ統合的に捉えるならば，「羊飼いが羊の世話をする（パストラルケア)」とは，単に「霊的（スピリチュアル）な次元のニーズを満たす」という次元を超えて，羊が持っている「すべての次元のニーズに対応してゆく」ということを意味するであろう。しかもすべては「神との関係」の中で起こる。神の慈愛のまなざしの中に置かれているということを忘れることなく，そのニーズに対応してゆくのである。「人はパンのみに生くるにあらず」と主イエスは言われたが，現実にはパンがなければ生きてゆくことができない我々である。しかしパンも含めてすべてを神との関係の中で受け止めてゆく次元がそこには示されている。そのように「羊のニーズに応える」ということは，物理的なことを含めて実に「具体的な事柄」である。その意味で「パストラルケア」は「スピリチュアルケア」よりも「より包括的で具体的，かつ根源的な概念」であることがわかる。「パストラルケア（牧会)」とは「フィジカルケア」「メンタルケア」「ソーシャルケア」「インテレクチュアルケア」「スピリチュアルケア」をすべて内包する概念であると位置付けることができよう[23]。ボンヘッファーが「罪の告白 Beichte」を「牧会の核心（Herz/heart)」として正鵠に捉えたように，「パストラルケア（牧会)」の中核には「罪の告白」と「和解（罪の赦し）の宣言」が来る[24]。あの「キリストの出来事」において現実のものとなった「神との関係の回復」がその中心に来るのである。そして「パストラルケア（牧会)」の視点から「スピリチュアルケア」を見るならば，「スピリチュアルケア」の中心にも「超越者・内在者との関係の回復（和解)」という主題があることが見えてくるであろう。それは「神 God」と「自己 self」と「隣人 neighbors」，そして「自然 nature」との「和解 reconciliation」であり「回復 restoration」なのである。

死を意識した時，人は自らの「過去」を振り返り，自らを支えてきた価値観や人間関係，自身のアイデンティティや自己像など，自らの「現在」を練り直し，最後に残された時間を自らの人生の「まとめ」と「統合」，そして「未来」のために用いてゆこうとする。その際に重要なものとして私が大切にしているのもやはり「信仰・希望・愛」という「三つの聖書的なモティーフ」である[25]。私はチャプレンとして緩和ケア病棟の患者たちに向かい合うときには―そのほとんどはノンクリスチャンであるが―，懐かしい「ふるさと」や「自然」や「星空」のこと，「ご両親」や「祖父母」，「ご家族」や「友人たち」などのこと，その人が一生懸命に打ち込んできた「サークル活動」や「恋愛」，「青春の蹉跌」のこと，「勉強」や「仕事」のこと等々，その人を支えてきた大切なこと（価値観や希望）を想起し，言語化し，物語ってもらうようにしている。それらの声にひたすら共感的受容的な姿勢で傾聴してゆくのである。これが私にとって向かい合う

相手に対して「根元語『我―汝』を語る」(ブーバー）ということであり，エリザベス・マッキンレーの「スピリチュアル回想法」のささやかな実践ということになろうか[26]。「過去を想起すること（アナムネーシス)」(それは「過去の現在化」とも言えようが）を通して，その人は次第に「自らの人生の懐 heart/bosom」とも呼ぶべき「魂 / こころ」の深いところに降りてゆき，それに触れてゆくのである。否，そこでは主体はもはや「私」ではないであろう。能動と受動がそこでは既に止揚されている。人は「死」と向かい合う中で自らの有限性を知り，魂の深い所にまで導かれ，そこで自分が「永遠の汝」から呼びかけられている「かけがえのない存在 irreplaceable being」であることに気づかされてゆくのである。そのことによって何か状況が変わるわけではない。しかしそこで起こっていることは，人間に向かって「汝よ」と呼びかけてくる「永遠の汝」と，沈黙の中でただひたすら向こう側から響いてくる「永遠の汝からの声」に耳を澄ませている人間と，その両者の間における「我と汝の出会い」である。そこで神と人とは「永遠の今」とも言うべき「至福の瞬間」を分かち合っている。確かに「もろもろの関係の延長線は，永遠の汝において交わる」(ブーバー）のである[27]。

「聴く」という旧字体が，向こう側から響いてくる「王の声に，耳と目と心を一つにして十分に用いて向かい合う」という深い意味を宿しているように，私たちは個々の「我と汝」の出会いの延長線上に「永遠の汝」たる神の姿を垣間見てゆくことができるであろう[28]。「永遠の汝」は個々の出会いを通して私たちに永遠の向こう側から常に「汝よ」と呼びかけている。その意味では，ブーバーが言うように，まことに「出会いは恩寵である」と言わなければならない。

4)「打ち砕かれた魂」が知る「スピリチュアリティ（霊性)」の深み

「スピリチュアリティとは，人生の危機に直面して『人間らしく』『自分らしく』生きるための『存在の枠組み』『自己同一性』が失われたときに，それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり，自分の内面の究極的なものに求める機能である。」(窪寺俊之[29])

窪寺俊之氏は「スピリチュアリティ」について上記のように的確かつ明快に定義している。「人生の危機 crisis」に「直面」することを通して私たちは，それまで自分の「人間らしさ」「自分らしさ」を支えてきたところの，それまでは自明であると思われた「自己」の「存在の枠組み（あるいは基盤)」や「アイデンティティ」が大きく揺さぶられる中で大きな不安と痛みとを感じることになる。「スピリチュアルペイン」とはそれまでは「無自覚的であったもの / 無意識であったもの」が「自覚的なもの / 意識されたもの」として呼び覚まされてゆくプロセスにおいて私たちが味わう「痛み」なのである。前述のように「痛み」には大切なものに気づかせてくれるという覚醒作用がある。それらの「痛み」に促され，それらの「痛み」と格闘することを通して，私たちは自己の「存在の枠組み」や「アイデンティティ」を再構築してゆくことになる。人生の危機の中で私たちは，「自己の外」にあると考えられる「超越的なもの（それを私たちは God/the One/the Transcendent/the Something Great/the Nature と様々に呼びうるであろうが)」や「自己の内面」にあると考えられる「究極的なもの」との関係の中で，自己の根底を支える「存在の枠組み」や「自己という存在の核心部分」を再構築しようとしてゆくのである。「超越と内在」の関係がどのようなものであるのかという点に関してはさらに厳密に考えてゆく必要があろうが，それは今後の課題として残しておくこととしたい。

この「窪寺定義」に関して，私の中にはその「機能」とは人間の「何」に備わった機能なのかという疑問が残っている。それは人間の持つ「何」が果たす「機能」であるのか。YMCA の三角形のロゴマークのように人間に「身体 body」

と「精神 mind」と「霊 / 魂 spirit」が備わっているとすれば，「スピリチュアリティ」は人間の「霊 / 魂 spirit」が有している「機能」であると私自身は考えている。それはアウグスティヌスが『告白』の冒頭で次のように記している通りである。「神よ，あなたは私たちをあなたに向かって造られました。だから私たちの魂はあなたのうちに安らうまでは憩いを得ることはないのです」。聖書によれば人間は「神の似姿 imago dei」に造られた（創世記 1：27）。それは私たち人間が，神との真実の「我―汝」という人格的応答関係の中に生きるよう太初から創造されているということを意味する。創世記の 2 章はもう一つ別の創造物語を伝えているが，そこでは土の塵で造られた人間が神の「息（ルーアッハ）」によって生きるものとなったと記されている（創世記 2：7）。人間には「神」から「神の霊」が吹き入れられ，それが人間の中に「霊 / 魂 spirit/soul」として宿っているのであろう[30]。窪寺氏の「定義」の最後の部分に私は「人間の魂が持つ」という言葉を加えて，「スピリチュアリティとは，……人間の魂が持つ機能である」という表現として理解したいのである。

そして「スピリチュアルケア Spiritual Care」とは何かと問われれば，人間の「魂 soul/ 霊 spirit」が有する「スピリチュアリティ」の次元に深く目を留め，目の前にいる具体的な人の「スピリチュアルニーズ Spiritual Needs」の切実さと重要性を知り，相手の持つ「スピリチュアルペイン Spiritual Pain」を「共感的な受容と傾聴」という謙虚な姿勢をもって受け止め，それに「手当て」をしてゆくことであると定義することができよう[31]。その「スピリチュアルな痛み」とは，前述のように「人生の危機 crisis」に直面する中で「自己の存在の枠組み（基盤）existential structure/ground」と「自己同一性 self identity」を再構築するための「自己覚醒の契機」となる「痛み」でもある。

なお「霊 / 魂」に関して一点補足しておきたい。「わが魂よ，主をほめよ」と繰り返し詩編は歌っているが，神が私たちに賜った「霊 / 魂」とは「打ち砕かれた魂」（詩編 51：19[32]）のことである。前述のように，現代社会の持つ「cogito-ego の肥大化」傾向，「我欲実現欲望の肥大化」「我慢」の延長線上には「救い」はない。そのような「我（が）」が「打ち砕かれること」なしには，「主体が転換する」ことなしには，決して「救い」には到達できないのである。いや，正確に言うと，既に救いはここに来ているのである。初めから身近にあった「幸せの青い鳥」に気づかなかっただけなのだ。ただ「打ち砕かれた魂」だけが「今，ここ」での「神の恵みの事実」に気づくことができる。信仰とは，神が望んでいる事柄を確信し，神の見えない恵みの事実を確認することだからである（ヘブライ 11：1）。パウロが「今や，恵みの時，今こそ，救いの日」（2 コリント 6：2）と言う時，パウロには既に「ここに来ている救い」が見えているのである。この救いは既に二千年前にキリストが十字架と復活において私たちのために勝ち取ってくださった救いである。「打ち砕かれた魂」をもって，私たちが「自分を捨て，自分の十字架を背負って，キリストに従う」こと抜きには「救い」はない[33]。ボンヘッファーはそれを次のように言い切っている。「服従するもののみが従順であり，従順な者だけが服従する」のだと[34]。

肥大化し繭化した「cogito-ego」が打ち砕かれる時に初めて人は，天から「I love you!」と呼びかけてくる「存在是認の声」が響いていることに気づく（マルコ 1：11）。その「永遠の汝」からの呼びかけの「声」を，私たちは「主よ，あわれんでください」と祈りながら，耳と目と心を一つにして十全に用いて全身全霊で受け止めてゆく。その時に人は，「神の恩寵」によって既に「cogito-ego」から「credo-ego」へと変えられ，「新しい人間」に創造されているのである。これが「シェマー，イスラエル！」と聖書が私たちに命じている事柄である。

人間が最初から「神の似姿 imago dei」に創造されており，「神の声」に聴従するために「霊 / 魂の機能 spirituality」が与えられているという

ことは，何と不思議で驚くべき事柄であろうか。まことにAmazing Graceというほかない。神がその独り子を賜るほど深く私たちを愛してくださったように，私たちもまた，共にキリストを見上げて，自らの存在を喜び祝いながら，心を尽くし，魂を尽くし，力を尽くして，「主なる神」を愛し，それに聽従してゆきたいと願うものである。“credo ergo sum.（我信ず，ゆえに我あり。）”と告白しながら。

「聽け，イスラエルよ。我らの神，主は唯一の主である。あなたは心を尽くし，魂を尽くし，力を尽くして，あなたの神，主を愛しなさい。」（申命記6：4-5）

注

1　たとえば，筆者の属する「日本福音ルーテル教会（JELC）」と宣教協力関係にある「米国福音ルーテル教会（ELCA）」や「フィンランド福音ルーテル協会（SLEY）」などからもそのように報告されている。ELCAは25年前には500万人ほどいたメンバーが，同性愛の教職按手問題等で離脱したメガチャーチなどがあって，現在は400万人を切っているということであるし，フィンランドにおいても「国教会」は90数％いた教会員数が70%を切るところまで落ちているという（ELCA牧師・Dr. Franklin石田順孝氏とSLEY宣教師・Dr. 吉村博明氏の報告による）。JELCとの宣教協力関係にあるドイツ・ブラウンシュバイク領邦教会においても同様であろう。またそこには，ヨーロッパでは国が教会に代わって集めている「教会税」の問題もあると考えられる。

2　例えば，従来の「宗派・宗教」の枠を超えたかたちの被災地に対する協力支援態勢や，2007年に設立された「日本スピリチュアルケア学会」の中に位置付けられている東北大学における「臨床宗教師」の養成や，筆者の関わる上智大学グリーフケア研究所における「臨床牧会教育（CPE）」の演習実践等がある。また，筆者も関わっている「杉並区宗教者懇話会」では，杉並区の協力を得て，JR阿佐谷駅前で募金活動をも何度か行ってきた。被災地で行われているお坊さんによる移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」（金田諦應氏）などの働きも注目を集めている。

3　例えばJELCでは，現在100名の教職（牧師）が120ある各個教会を支えているが，現在教職の大量引退の時を迎えている。70歳で定年退職を迎える教職がこの20年間で60名いると予想されている。新卒の牧師は平均で年に2.5名誕生しているが，今後さらに信徒の高齢化と教職数の減少が続く中でさらに厳しい現実が予想されている。

4　英語ではPastoral CareまたはPoimenics，ドイツ語ではSeelsorge（魂の配慮）と呼ばれる。キリスト教会は二千年に亘る牧会の歴史を持っている。そのことは，例えばクリスティアン・メラー編，加藤常昭訳，『魂への配慮の歴史』（日本基督教団出版局，2000-2004，全12巻）などを参照されたし。

5　この点に関してヴォルフハルト・パンネンベルクは，「説教ではなく，聖餐こそが教会的生命の中心を占めるのである」と語っている（『現代キリスト教の霊性』，教文館，1987，p53）。

6　マルティン・ブーバー，田口義弘訳，『我と汝』，みすず書房，1978，p5。

7　井上忠，『超＝言語の探求：ことばの自閉空間を打ち破る』，法藏館，1992

8　ブーバー，前掲書，p62-63。ブーバーは根元語「我―それ」を語ることを「悪」としているわけではない。ブーバーは言う。「きみよ，それなくしては人間は生きることができない。だが，それとともにのみ生きる者は，人間ではない」（p48-49）。

9　ブーバー，前掲書，p48-49

10　2002年頃カトリック中央協議会で行われた「インターネットと教会」と題する松隈康史氏の講演会での「キリスト教の救いはそのような自我の肥大化の線上にはないのではないか」という指摘は今でも筆者の中には強い余韻を残している。

11　小川修氏が同志社大学大学院において2007-2009年に行ったパウロ書簡についての講義録を参照のこと。なおこの講義は現在リトン社より『小川修パウロ書簡講義録』として刊行中。筆者も刊行会の一員である。ローマ書Ⅰ―Ⅲは既刊（2011, 2012, 2013），コリント前書Ⅰも2014年秋に刊行された。また現在「前期論文集」の出版が準備されている。

12　これはブーバーが根元語「我―汝」の我と根元語「我―それ」の「我」が異なると語ったことと重なっている（ブーバー，前掲書，p5）。

13　この「cogito-ego」，「credo-ego」という表現自体は，小川先生のものではなく，私自身に属するものである。

14　ブーバーは前者を「個我Eigenwesen」と呼び，後者を「人格（Person）」と呼んでいる（前掲書p84）。

15　小川修氏は，カール・バルトや滝沢克己と共に，私たちは既にキリストによって全く新しい光（救いの現実）の中に招き入れられていると語る。私

たちの多くはその「事実 fact」に気づいていないだけなのである。「イエス・キリストの出来事」は二千年前のあのゴルゴダの丘の上において唯一回限りの出来事として既に起こった事柄であり，小川氏によると「人間はこの出来事によってキリストと一体化され（「人基一体」），既に救われている」という確信をパウロは持っているのである。パウロは正しく自覚している，わたしがキリストの中にあり，キリストがわたしの中にある（I in Christ, Christ in me）ということを（ガラテヤ２：20）。小川氏によれば，神が呼びかけてキリストが「はい」と応えるという呼応関係は，十字架における最後の瞬間まで首尾一貫して貫かれている。マルコとマタイ福音書は十字架上でキリストが最後に一声大きく叫んだと記しているが，小川氏はこれを「アッバ（父よ）」という神の呼びかけへの応答の言葉として捉えているのである（小川修，『パウロ書簡講義録　第３巻』，リトン，2013，p44-89）。

16　筆者は，WHO に倣って，「人間 human being」を，①身体的 physical，②精神心理的 mental/psychological，③社会的 social，④スピリチュアル（霊）的 spiritual という「四つのカテゴリー」において「ニーズ needs」を持った存在として捉えていたが，ウァルデマール・キッペス氏はこれらに「知的 intellectual な次元」を加えて５つのカテゴリーを挙げている。これは特に，エリザベス・マッキンレー等が探求している「認知症におけるスピリチュアルケア」という課題を考える際に，人間の持つ「知的 needs」の次元は重要なポイントになると考えられる。我々は人生の危機的な状況（crisis）においてこれらの「ニーズ needs」を「不安 anxiety」や「渇望 desire/thirst」，「痛み pain」において自覚する。いずれにせよこれら５つの次元は「区別はされても分離することはできないもの」として全人的（holistic）統合的（integrated）に捉えてゆく必要があるであろう。また，キッペス氏は「pain」には「罰」という意味が含まれており，それによって苦しみが増し加えられている側面があるとして「ペイン pain」という語を用いずに，「痛み」という語を一貫して用いている（ヴァルデマール・キッペス，『スピリチュアルな痛み～薬物や手術でとれない苦痛・叫びへのケア』，弓箭書院，2009，特にまえがきを参照）。筆者は，「ペイン pain」という語が既に十分に日本に定着していると考えるので，キッペス氏の指摘を重要なものと踏まえた上で，それを一般的な意味で用いてゆくこととしたい。

17　マザーテレサは「愛の反対は憎しみではなくて無関心」と言ったが，「無関心，無感覚，無関係，無感動」といったものはいずれも「痛みの感覚が麻痺した状態」であると言えるであろう。「痛み」は確かに私たちの感覚を呼び覚ましてくれるのである。

18　ここから牧会を shepharding という語で捉え直すスワード・ヒルトナーなどもいる（スワード・ヒルトナー，西垣二一訳，『牧会の神学～ミニストリーとシェパーディングの理論』，聖文舎，1975）。

19　私の牧する教会には羊飼いを描くステンドグラスが礼拝堂の正面に設置されている。それは「キリストのご臨在（real presence）」を証しし，「礼拝」自体も「キリストの奉仕」（Service/Gottesdienst）であるということを示している。私たちはそれに「感謝の応答」をもって答えてゆくのである。なお，ウィリアム・ウィリモンに『牧会としての礼拝～祭司職への召命』という書物もある（越川弘英訳，新教出版社，2002）。礼拝は羊飼いキリストご自身による牧会の働きなのである。

20　JELC 定年教師である北尾一郎牧師は，ある時に私の話に対して，「牧師も羊の一匹です」というリアクションをしてくださった。むべなるかなである。それ以来私は，「厳密に言えば，牧師とは『牧羊犬的な働きをする羊』ということになろうか」と補足するようにしている。

21　もちろんこのことは「専門職としての牧師」の働きを曖昧にするということではない。「信徒牧会者」の働きは神学的には「全信徒祭司性」という事柄の中に位置づけてゆくことができるであろう。私見によればそれは「全信徒牧会者性」として理解されうる事柄である。筆者がかつてインターンをしたカナダ B.C. 州のルーテル教会では Lay Assistant として女性信徒の信徒宅訪問を行っている方が教会のスタッフに一人おられた。

22　ブーバー，前掲書，p61。

23　人間の持つ「身体的」「心理的」「社会的」「知的」「霊的」な「ニーズ」は，すべてが連関しているため，優先順位はあるとしても上下の関係はないと思われる。例えば「歯が痛い」という「身体的ペイン」が生じた場合には，それ以外の次元のペインがあったとしてもそれらは背後に退き，多くの場合には最前面にその「歯痛」が出てくるということになるであろう。もしかしたら「大切な存在を失った悲嘆」は「身体的な痛み」を麻痺させることもあるかもしれないけれども。

「パストラルケア（牧会）」と「スピリチュアルケア」の関係について，その「手段」に関連して一言補足しておきたい。「共感的な受容と傾聴」という「ケアプロヴァイダー」の姿勢は両者に共通して求められるものであるとしても，前者の場合

には「そのケアを受ける側」は多くの場合，キリスト者または求道者である。そのためそこでは聖書を読んだり，讃美歌を歌ったり，祈りを捧げたり，聖礼典を執行したり，礼拝式文などを用いたりすることを「具体的な牧会手段」とすることができるであろう。しかし，後者の場合には，相手がノンクリスチャンであるために，そのようなものを用いることは殆どない。病院チャプレンとしての経験から言えば，患者から求められれば聖書の話をするし祈ることもあるが，多くの場合はただ黙って相手の話に耳を傾けることが求められるので，患者の傍でその呼吸に合わせてそこにいる（Being）ということを大切にしている。また，「出会いは恩寵である」（ブーバー）という思いから，患者を訪問する前後に「沈黙の祈り」を捧げることも少なくない。「スピリチュアルケア」においては音楽や歌，詩や本，写真などを用いることもできるであろう。「娘の結婚式でも歌いましたから」というリクエストをもらって「いつくしみ深き」を患者さんと一緒に歌ったこともあった。10 年前から私自身も関わってきた『リラプレカリア（祈りのたて琴）』というプロジェクトも，緩和ケア病棟の患者さんたちには喜ばれている。スピリチュアルケアの「手段」として私自身が大切にしているのは，「存在 Being そのもの」であり，「呼吸」「声」「穏やかな笑顔（笑顔施）」「対話」というところであろうか。

24　ボンヘッファー，森野善右門訳，『説教と牧会』，新教出版社，1975，を参照。なお，ルターとボンヘッファーにおける「罪の告白 Beichte」に関して私自身はルーテル神学校の卒論として執筆した（1986。その一部は同年の『ボンヘッファー研究』にも発表）。ここで「罪」とは「神との関係の破れ」を意味し，それに対して「義」は「神との義しい関係」を意味すると理解したい。また「罪の自覚」という面では，それを私自身は「罪責感情 guilt」と「羞恥感情 shame」の両面から受け止める必要があると考えている（拙論「罪 Guilt と恥 Shame」『ルター研究』2002，ルター研究所編）。

25　窪寺俊之氏も「スピリチュアルケアのアセスメント」の「指標」に関して同様に語っていた。前掲書，p77-78 を参照。

26　エリザベス・マッキンレー，コレン・トレヴィット，馬籠久美子訳，『認知症のスピリチュアルケアーこころのワークブック』，新興医学出版社，2010

27　ブーバー，前掲書，p98。

28　「私が汝と出会うのは恩寵によってである。一探しもとめることによっては汝は見出されない。しかし私が汝にむかってあの根元語を語りかけることは，私の存在そのものの行為，私の本質的行為である。」（ブーバー，前掲書，p17）

29　『スピリチュアルケア学序説』，三輪書店，2004，p8。

30　「神」を意味する YHWH（ヤハウェ）というヘブル語が本来は「ヤッハッフゥーー」という息を吹き込む音から来ているという説明を Richard Groves という元カトリック神父から聞いてハッとしたことがある。

31　Spirituality を「霊性」，Spiritual Needs を「魂の飢え渇き」，Spiritual Pain を「魂の痛み」，Spiritual Care を「魂への配慮」という日本語に訳することもできよう。ドイツ語で牧会を表す「Seelsorge（魂への配慮／魂による配慮）」という語はなかなか味わい深い語であると改めて思う。ヴィクトール・フランクルの邦訳『人間とは何か～実存的精神療法』（初訳は『死と愛』1957）の原題が “Ärztliche Seelsorge” であったことをも意義深く想起する。

32　「しかし，神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を／神よ，あなたは侮られません。」（詩編 51：19）このことに関して思い起こすことがある。私は神学生時代に一年三ヶ月，東京いのちの電話のボランティア訓練を，鈴木育三，伊藤文雄という二人のスーパーヴァイザーのもとで受けた（1982 年 4 月より 1983 年 6 月まで）。そこで伺った鈴木育三先生の言葉を忘れることができない。「（私たちの）思いというものは，思い上がりでもダメだし，思い下がりでもダメ。思いは正しい位置に置かなければいけない」。人間の「思い」は「高慢」と「卑下」の間を揺れ動くものなのである。「要はバランスなのだ」という点に深く気づかせられた言葉でもあった。詩編 51 編でダビデは，ナタンに糾弾されることを通して初めて自らの罪の重さに気づき，打ちひしがれている。そのダビデ自身の罪に「打ち砕かれた霊」「打ち砕かれ悔いる心」こそが神の喜ばれる真の「いけにえ／犠牲」なのである。

33　小川修氏は「我欲の中でも『宗教的欲望』ほど質の悪い欲望はない」と言う。「cogito-ego」というモノローグ的な「我慢」の延長線上にではなく，「credo-ego」というダイアローグ的な「我」の中にこそ，神の呼びかけに「はい」と応えてゆく「真のアダム（人間）」がおり，「既に今，ここに」私たちに備えられている「神の〈まこと〉πίστις」に気づく真の「自己 self」があるのである。

34　ディートリッヒ・ボンヘッファー，森平太訳，『キリストに従う』，新教出版社，1966，p13-42。神は教会に対して「イエス・キリストの生命」という「高価な恵み」を贈り給うた。神はみ子を我々

の生命のために，高価なものとして，惜しみなく，我々のための犠牲とされたのである。ボンヘッファーは『服従』（邦訳名『キリストに従う』）の中で恵みが高価であること，そして高価であるがゆえにその恵みはイエス・キリストに対する服従へと招く恵みであることを強調する。しかし当時のプロテスタント教会は，恵みが服従を包含することを見失ってしまい，その結果それを「服従のない恵み」，即ち「安価な恵み」としてしまった。ルターの再発見した「信仰義認の教理」がキリストに対する服従から切り離されてしまった時，そこにはもはや「安価な恵みの死骸」しか残らなかったのである。ボンヘッファーは，信仰が敬虔を装う自己欺瞞や安価な恵みとならないために「従順の第一歩」が踏み出されなければならないと考えた。そして神の高価な恵みを受け取るための「服従の第一歩」として，彼は「罪の告白 Beichte」を再び福音主義教会に取り戻そうとしたのである。

Pastoral Care and Spiritual Care

Oshiba, George J.

Today in our modern society, people often say "I'm not religious, but spiritual." Since Descartes discovered "the modern ego" which is the subject of *cogito*, the human ego has mono-logically grown larger and stronger. We have often given it priority to satisfy our ego-centric desires. In such a closed situation people face a blockade and need to breathe fresh air. This paper explores the meaning of "spirituality" and "spiritual care" in comparison with the meaning of Christian "pastoral care." Martin Buber has clearly stated that human beings were created in God's image so that they might have dialogue with "the Eternal Thou" and others who speak the ground words "I and Thou"(1923). It is proposed that only the heart that has been broken down and emptied is able to listen to the Voice of Silence outside the inner self as a taste of Spiritual grace.

Keywords: Pastoral Care, Spiritual Care, Spirituality, Martin Buber, I and Thou